

平成22年 6月 7日現在

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520027

研究課題名（和文） カントの実践哲学からのビジネス倫理学に関する研究

研究課題名（英文） Study on Business Ethics from a Kantian Perspective

研究代表者

勝西 良典 (Katsunishi Yoshinori)

上智大学・文学部・講師

研究者番号：70384162

研究成果の概要（和文）：3年間の研究のなかで、ビジネス倫理の教科書を出版し、アメリカの主要な研究書を翻訳し、カントの実践哲学のもつ形式主義がかえってビジネスと倫理の関係にかんする多様なモデルを提供することが示された。また、経営学者と哲学・倫理学者と実務家の交流、および日米独の研究者の交流が確立された。その理論的成果の一端は2010年8月出版予定の書物で公表される。また、実際の活動としては、経営倫理実践研究センターにおいてホールディングス形式の企業形態における共通の規範の醸成法等の各論において継続される。

研究成果の概要（英文）：The research accomplished its tasks in the following ways: (1) We published a textbook on business ethics, and (2) translated an English major literature on business ethics into Japanese and introduced it. (3) Our research concluded that Kant's formalism in his practical philosophy provides us with the various models of the relations between business and ethics. We are going to publish a book and show this idea soon. (4) We established the joint venture on business ethics among business scholars, philosophers, ethicists, and business people in Japan, America, Germany, and so on. (5) We will regularly have the chance to talk with business people about major issues of business ethics in the Business Ethics Research Center.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 哲学・倫理学

キーワード：経営倫理学、ビジネス・エシックス、ステイクホルダー理論、ビジネス倫理学、
応用倫理学、基礎理論、倫理学、コーポレート・ガバナンス論

1. 研究開始当初の背景

(1) ビジネス倫理学の先進国アメリカでも、

企業の社会的責任は今なお中心的なテーマである。コーポレート・ガバナンスに関する

ストックホルダー理論とステイクホルダー理論との間で激しい論争が行われていたが、短期的投機目的の株主を保護することが公共の利益と合わない主張する論者が増え、フリードマン流の倫理的利己主義やリバタリアニズムを乗り越える原理が求められるようになった。そのような背景の中で、ノーマン・ボウイは、カントの実践哲学を基盤にして、利他主義的ふるまいが逆説的にストックホルダーの構成するビジネス共同体の利益を増進させることを説いた (cf. Norman E. Bowie, *Business Ethics: A Kantian Perspective*, Oxford 1998.)。ただしこの研究がリバタリアンを完全に納得させたわけではなく、実質的価値の強要を問題視する声も多い。そこでカント的形式主義を再評価し、ロールズ的な手続き的正義論とは異なる汎用性の高い倫理理論を構築し、ビジネス倫理学の理論的礎とすることが望まれる。

(2) カント研究の動向との関連で言うと、政治哲学（とくに平和論）や環境倫理については多く論じられているが、ビジネス倫理学に対する言及は、ヨーロッパでもほとんど見られない。

(3) 日本では、理論的・基盤的研究はおろか、哲学者・倫理学者がビジネス倫理に携わることが極めてまれである。ちなみに日本倫理学会では、2005年度にはじめて「経済倫理の現在」という本格的なワークショップが開かれたが、ビジネス・エシックスとこの「経済倫理」をいかに分けるかといった点にこだわるなど、いまだ黎明期といった感をぬぐえない。

(4) 研究代表者は、カントの理論哲学の研究から出発し、その実践哲学へと関心を広げていった。最近では、自由と他者との共同の関係を、利他的原理を導入せずに根拠づける原理を探求していた。その中で、「目的の王国」を共同体の可能の制約と見るボウイの前掲書に出会った。おりしも東北公益文化大学から「地域振興システム確立のための日本型公益ビジネスモデルの研究」（文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（社会連携研究推進事業））のための学外研究員として、ビジネス倫理の哲学的・倫理的基盤を構築する依頼を受けた。この二つの契機が結びつき、今回の研究課題を申請することにした。

2. 研究の目的

(1) カントの実践哲学によるビジネス倫理の基礎づけ

本研究はカントの実践哲学の構想からビジネス倫理の基盤を構築することを目的としている。日本でも近年CSRに関して盛んに論じられているように、ビジネスをめぐる活

動を、人間のより広い実践のコンテキストに位置づけることが社会的要請になっているのだといえよう。他方、「共通善」、「最大多数の最大幸福」、「公共の福祉」といった言葉は、価値観が多様化した現代社会では、はっきりした効力を持たない。これに対してカントは定言命法という道徳法則の与えられ方に着目し、命令の実質的な内容を規定することなく、人間の行為の構造から「善さ」を規定しようとした。この方法は、われわれのビジネス実践の分析に、特定の実質的価値を持ち込むこと（これはリバタリアンによるロールズ批判の核心である）を抑止することができる。またこの視点は、現代のストックホルダー理論対ステイクホルダー理論の論争に対し、「利己主義対利他主義」ないし「利己主義と利他主義の和解」というコンテキストを離れる可能性を示している。以上の理由から、カントの実践哲学の構想は現代のビジネスの倫理性を分析するうえで非常に有効だと考える。

(2) ビジネスと倫理の内的連関の研究

ビジネスと倫理は従来対立するものとして研究されることが多かったが、このような方法では、ビジネス倫理学はビジネスにとって無力なものとなってしまいか、倫理的人間にとってビジネスはせいぜい必要悪ということになってしまいかねない。本研究では、ビジネスの実践を人間に本性的なものとして捉え、その上でその基盤となっている倫理的な性格を明らかにすることを狙っている。

(3) 具体的事例研究

カントは三批判書のような理論的・基盤的研究をする一方で、『人間学』や『自然地理学』に見られるような具体的事例研究も好んで行った。これに倣って、本研究では単なる理論的研究ではなく、具体的事例を踏まえた基盤研究を行う。したがって、理想の人間ではなく、現実の人間を考察する。より正確には、現実の人間の中に理想実現の可能性を見届けようとする。

(4) 海外との協力研究関係の確立

哲学・倫理学の領域は、思想や文化の違いもあり、海外と協力して研究することが困難な場合もある。ビジネスはそのような思想や文化を越境する。カントのコモポリタニズムは、ビジネスの具体的なあり方である。この点を考慮し、海外の研究者と恒常的協力関係を作ることを目的とする。

(5) 日本からの基盤研究の発信

従来日本は、学問領域を問わず、基盤研究を発信することが少なかった。ビジネスの世界は、そんな日本が外国に対して大きな影響

を与えてきた数少ない分野である。本研究では、網羅的ではないが、具体的な提案を海外に向けて発信することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) ビジネス倫理学の先進国アメリカとの差を埋めるために、アメリカの学術書を翻訳・紹介する。

(2) ビジネス倫理学関係の学術書のデータベースを作成する。

(3) 経営倫理実践研究センター（日本経営倫理学会の企業向け教育機関）の会員企業の協力を得て毎月面談を実施し、実務家の抱える倫理的ジレンマを収集・解明するとともに、その成果をセンターや企業での研修にフィードバックする。

(4) 哲学者・倫理学者の集まる学会・研究会で発表し、ビジネス倫理学への関心を喚起する。

(5) 海外の学会・研究会に参加し、学術交流を深める。

(6) 海外の研究者を含めた研究会を実施し、成果物を出版する。

4. 研究成果

(1) ビジネス倫理学自体の知名度が低い点、また、大学の授業で使える教科書がなかった点を鑑みて、リーディングス形式のものをまず世に問うことにした。哲学・倫理学を専門とする学者が応用倫理の授業を受け持たざるを得ない昨今、哲学・倫理学の側からの分析をしつつ網羅的な概説が含まれている本書は、一定の位置づけを得たものとする。また、実務家の方からは、経営学畑の学者とちがう角度の分析を知ってもらうきっかけになった。今後は、授業で使ってもらえる手ごろな価格設定で出せるように工夫をすべきだと思われる。

(2) 本研究の先駆である Norman E. Bowie, *Business Ethics: A Kantian Perspective*, Oxford 1998. を翻訳し、出版した。基本図書の翻訳ということで、一定の評価を得ている。今後は、若手研究者の研究に役立つことが期待される。

(3) ビジネス倫理学関係の学術書のデータベースを、の成果物の巻末と下記ホームページにアップした。アクセス傾向の分析がまだ終わっていないが、実務家も含めた関係者の一定の便にはなっていると考える。

(4) 経営倫理実践研究センター（日本経営倫理学会の企業向け教育機関）のフェローとしてケース・メソッドの研究部会と啓発・研修ツール部会、及び個人の倫理観を醸成する研究会に参加し、実務家との対話・懇談を通してお互いの視点のちがいを共有することを始めた。組織の構造を自然条件とみなしながらまずはコンプライアンスを徹底することに終止し挫折しがちな CSR 関係の担当者に対して、コンプライアンス違反や倫理的規定違反がなくなることにもそれなりの論理があることを理解してもらい、そのことと向き合うことの必要性とそのための対策と一緒に工夫するきっかけが芽生え始めている。

(5) カントとフィヒテの自我理解を基盤にして、ビジネスを含む人間の活動に対して隣人愛を強要せずに他者を尊重する可能性が開かれることを明らかにした。この考え方は、哲学者と一部の実務家の関心を引いたが、理論的に難解なところが多く、ビジネス倫理の書籍（後出）では、できるだけわかりやすく書くように努力した。

(6) 山形でビジネスと公益に関する国際学術研究会を行い、利益の最大化という原理が直接ないし背後で実現する公益と、利益の最大化を制限することによって実現される公益の関係を問題にし、公益なり社会的責任といった言葉の持つイデオロギー性を批判すると共に、こうした言葉を使うことの有効性をも明らかにした。この成果は、『ビジネス倫理読本——理論と教育の第一歩——』（仮題）という書物に納め、2010年8月頃に出版予定。

(7) 東京で「カントの実践哲学の構想を用いたビジネス倫理の基盤構築」をテーマに国際学術研究会を行い、金融恐慌以降の国際経済秩序を再構築するために、カント倫理学の実質的義務論とコスモポリタニズムが今なお有効なこと、このような評価とカント倫理学のもつ形式主義が矛盾しないこと、実用的観点からしばしば要求される個別主義とカントの普遍主義が両立することなどが明らかにされた。この成果は、『ビジネス倫理読本——理論と教育の第一歩——』（仮題）という書物に納め、2010年8月頃に出版予定。今後は、①ビジネス倫理における仮言命法の有効性、②共通感覚を基盤とした理性による道徳的多元論の克服、③カントの義務論と合目的性の観点から見た環境への義務について考察を深める必要がある。

(8) 南山大学で採択された2007-2010年度基盤研究(A)ドイツ応用倫理学の総合的研究(課題番号19202001)、神田外語大学異文化コ

コミュニケーション研究所、日本経営倫理学会、経営倫理実践研究センターとの連携を橋渡しすることにより、日本のビジネス倫理学とヨーロッパ（特にドイツ）の経営倫理学とアメリカのビジネス・エシックス、および日本の実務家との交流が可能になった。南山大学のデュッセルドルフ大学との提携と神田外語大学の国際シンポジウムは定例化することになっており、トヨタ自動車の問題やグローバル・コンパクト、ISO26000 の実際の運用の問題について引き続き国際的に協議する体勢が整ったことは特筆に値する。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計8件）

- ①アルベルト・レール 著、勝西良典 訳、企業倫理における尊厳、ドイツ応用倫理学研究、査読無、創刊号、2010、24-45
- ②中谷常二、中心市街地活性化についての一考察、公益ビジネス研究年次報告書、査読無、Vol.4、2010、28-33
- ③中谷常二、公務員倫理の考え方、公務研修、査読無、第207号、2010、62-73
- ④勝西良典、カントの形式主義を擁護する——ビジネスの「倫理」のために——、「カント倫理学と企業経営」に関する研究会資料集、査読無、2009、1-26
- ⑤中谷常二、佐藤隆也、地方都市における商品開発とマーケティング——山形県庄内地域を事例として、商品開発・管理学会第12回全国大会講演・論文集、査読有、2009、116-124
- ⑥中谷常二、企業内倫理研修におけるケース・メソッドの活用、公益ビジネス研究年次報告書、査読無、Vol.3、2009、30-33
- ⑦中谷常二、経営倫理学における倫理とは何か——倫理的に考えることの一考察、日本経営倫理学会誌、査読有、第16号、2009、117-126
- ⑧勝西良典、本質を欠いた主体——「他者論」を代替するカントとフィヒテの自我理解——、フィヒテ研究、査読有、第15号、2007、83-101

〔学会発表〕（計7件）

- ①加藤泰史、浜渦辰二、田中朋弘、勝西良典、山中裕、ビジネスとケア——ビジネス・エシックスへの新しい倫理的アプローチ——、国際シンポジウム「ビジネス・エシックスを多角的に考える」、2010年2月13日、神田外語大学
- ②勝西良典、高い倫理観を持つとはいかなることか、「倫理観の高い人材を育成する方法の研究」分科会（経営倫理実践研究セン

ター）、2010年1月15日、海事ビル（東京都）

- ③勝西良典、カントの形式主義を擁護する——ビジネスの「倫理」のために——、「カント倫理学と企業経営」に関する研究会、2009年9月7日、上智大学
- ④中谷常二、佐藤隆也、地方都市における商品開発とマーケティング——山形県庄内地域を事例として、商品開発・管理学会第12回全国大会、2009年6月21日、山形大学
- ⑤中谷常二、ビジネスの本質についての倫理的考察、日本経営倫理学会第16回大会、2008年10月25日、慶應義塾大学日吉キャンパス
- ⑥中谷常二、The business ethics education at Japanese manufacturing corporations、Proceedings of 10th International Institute of Industrial and Manufacturing Culture Conference、2008年10月17日、パレス神戸
- ⑦勝西良典、ステイクホルダー理論を支えるカントの形式主義、日本カント協会第32回学会、2007年10月27日、筑波大学

〔図書〕（計2件）

- ①ノーマン・E. ボウイ 著、中谷常二、勝西良典、他、訳、晃洋書房、利益につながるビジネス倫理——カントと経営学の架け橋——、2009、244+30
- ②中谷常二、勝西良典、他、晃洋書房、ビジネス倫理学、2007、240+14

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://nakayasemi.blog43.fc2.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

勝西 良典 (Katsunishi Yoshinori)

上智大学・文学部・講師

研究者番号：70384162

(2) 研究分担者

中谷 常二 (Nakaya Joji)

東北公益文科大学・公益学部・准教授

研究者番号：70398501

(3) 連携研究者

()

研究者番号：